

2022年12月11日 礼拝説教要旨
詩編講解説教130「主を待ち望め」
詩編130：1～8、ローマ8：18～25

マルチン・ルターは、この詩編第130編を「聖書の正しい師であり先生」と呼びました。それはこの詩編が聖書の伝えている信仰の本質を教えているということでしょう。冒頭「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください」（1～2節）とあります。「深い淵の底」とは光の届かない場所であり、希望が持てない、絶望の極みのような場所です。ある人は「死の領域」と説明しています。深い海底は太陽の光が届かない、まさに死の世界でしょう。何よりこの詩人は自分がそのような場所にいることを自覚しています。これは一つの譬えではありますが、この場所の感覚がとても重要です。つまりわたしたちは今どこにいるのかということです。

皆さんは自分がどこにいるとお思いでしょうか。今生きているこの世界が自分の本来の居場所でしょうか。パウロは次のように言います。「わたしたちの本国は天にある」（フィリピ3：20）と。またヘブライ人への手紙の著者も「自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であり」「天の故郷を熱望していた」（11：13～16）と述べています。つまり聖書は、今わたしたちが生きている場所は本来わたしたちがいるべき場所ではないということを明らかにしています。本来わたしたちが生きてべき場所がある。それはどこでしょう。そもそもどうしてわたしたちはあるべき場所から離れてしまったのでしょうか。

「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、誰が耐ええましょう。」（3節）ここに「罪」が出てきます。罪を神さまが逐一覚えられるなら、わたしたちは誰一人耐えられないでしょう。この罪こそ、わたしたちが本来あるべき場所から離れた原因です。創世記のアダムとエバの話を思い出してください。アダムとエバは神さまとの約束を破ってエデンの園を追放されました。それが他でもないこの「深い淵の底」であり、わたしたちはそこにいます。そしてそこは神さまから遠く隔たっていて、わたしたちの力では神さまに近づくことはできません。

わたしたちの側からは近づくことができないとなると、わたしたちの望みはただ神さまだけになります。ではその神さまはどのようなお方でしょうか。「赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを畏れ敬うのです。」（4節）「赦しはあなたのもとにあり」神さまだけが罪を赦す権威、赦す力を持っておられます。この赦しの権威こそ神さまの本質と申し上げてよいでしょう。そこには人間の力は一切及びません。わたしたちが何かをしたから赦してくださるというのではない。出エジプト記に「わたしは恵もうとするものを恵み、憐れもうとする者を憐れむ」（33：19）とあります。赦しは神さまの自由なご判断にかかっています。それが赦す力、権威なのです。人間同士の関係でも、権威を持つことは、自分の自由な意思で判断できることでしょう。良い方向にも悪い方向にも自分の判断で動かすことができる。神さまの権威はわたしたちを赦す方向に向かいます。どうしてそれが分かるのでしょうか。7節を見てください。「イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに、豊かな贖いも主のもとに。」（7節）「慈しみ」と「贖い」がその理由です。「慈しみ」（ヘセド）は、繰り返し説教の中でも触れますが、神さまの不変の契約のことで。一度、結ばれた契約を忠実に守られる。わたしたちに赦される資格などないにも関わらず、その契約のゆえに、一方的にわたしたちを愛し赦される。それが神さまの慈しみです。そして「贖い」（ペドゥート）は買い戻すことです。罪の中に捕らわれているわたした

ちをご自分のもとへ買い戻す。代価を払って取り返して下さる。「主は、イスラエルをすべての罪から贖って下さる」(8節)ともあります。一部分の罪ではない。すべての罪を贖う力を持っておられる。だからこそわたしたちは赦されるのです。それゆえに詩人は期待して「主を待ち望め」と言うのです。

イスラエルの人々は、この赦しをひたすら待ち望みました。「わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして、見張りが朝を待つにもまして。」(6節) この部分はイスラエルが神さまの赦しをどれほど待ち焦がれていたかが表現されています。夜の見張りは不安です。敵の襲来に備えて緊張の連続です。夜が明けるのを今か今かと待ちわびる。そのようにしてイスラエルは深い淵の底から神さまを待ち望み、祈り続けました。そしてその切なる祈りを神さまは聞いてくださいました。それがクリスマス、イエス・キリストの誕生です。この詩編第130編もまたキリストにおいて成就いたしました。この「豊かな贖い」(7節)こそイエス・キリストでなくて何でしょう。深い淵の底から、わたしたちを買い戻すために、キリストはご自身の命を十字架において献げられました。神さまの独り子という尊い代価が支払われたのです。それによってわたしたちは罪を贖われ、すべてを赦されて、神さまの御前に近づくことができるのです。

教会は今、主を待ち望むアドヴェントの時を過ごしています。確かにこの世界は罪ゆえに神さまの光が届かない深い淵の底にいるような世界でしょう。コロナがあり戦争があり、苦しみ、悩みの尽きない日々です。個々の歩みにおいても様々な試練があります。けれどもこの光が届かないような深い淵の底に、神さまの御手はすでに届いています。確かに御子イエス・キリストは来られ、そして十字架で死なれました。死の世界、深い淵の底である陰府にまで降られたと使徒信条は告白します。どんなに神さまから遠く隔たっていても、キリストはそこにもおられます。キリストがおられない場所はありません。そしてキリストはその死の淵からよみがえられ、天に昇られて、わたしたちを限りなく御前に近づけてくださいました。そしてこの世界を完成して下さるために、再び来られるのです。

改めてルターがこの詩編を「聖書の正しい師であり先生」と呼んだ意味がよくわかります。人間は何者なのか。どこにいるのか。神さまはどのようなお方なのか。そして聖書が語る神さまの救いとは何か。その答えがすべてここに語られています。ここに教会が宣べ伝えるべき福音があります。詩編130編はキリストの福音を雄弁に語ります。罪の赦しを信じて、希望を持って主を待ち望む。そのような前向きな、将来を期待する生き方へとわたしたちを導く御言葉です。